

20 世紀初頭イラクにおけるユダヤ系知識人とその文学活動

天野 優

同志社大学大学院神学研究科博士後期課程

日本学術振興会特別研究員 (DC)

要旨

20 世紀初頭、イギリスによる委任統治の開始と共に近代国民国家としての道を歩み始めたイラクにおいては、多様な宗教的背景を持つ知識人らが、より包括的かつ世俗的な社会の実現を目指し、定期刊行物の紙面上などで意見を交わしていた。イラクのユダヤ・コミュニティからもそうした潮流に積極的に加わる者が現れ、特に 1920 年代から 1930 年代にかけてはそうした新聞・雑誌に投稿する者や、自らアラビア語による定期刊行物の編集、出版を手掛ける者が現れる。本稿ではまず、20 世紀初頭イラクにおいて新しい知識人層が出現した背景を概観し、今日イスラエル建国前のユダヤ・コミュニティを扱う際に生じる歴史叙述の問題にも留意しつつ、先行研究の傾向を分析する。そうした上で本稿は、当時最も積極的にアラビア語での言論出版活動や文学作品執筆を行っていたユダヤ系知識人の一人アンワル・シャーウール(Anwar Shā'ūl, 1904–1984)と彼が関わったアラビア語文芸誌『ミスバーフ (al-Miṣbāḥ/ha-Menorah/灯火)』に焦点を当て、その位置づけを考察することで 20 世紀初頭イラクにおけるユダヤ・アイデンティティの一端を明らかにすることを目的としている。

キーワード

イラクのユダヤ人、アンワル・シャーウール、歴史叙述、印刷・出版、『ミスバーフ』

Early 20th Century Iraqi Jewish Intellectuals and Their Literary Activities

Yu Amano
Doctoral Student
Graduate School of Theology, Doshisha University
Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science

Abstract:

In the beginning of the 20th century, in accordance with the decline of the Ottoman Empire's authority and the rise of the British power in the Middle East, Iraq had undergone a profound change. During that period, which experienced rapid westernization and subsequent modernization, its Jewish population too was contributing to the development of the society. Secularization of the public sphere in Iraq eventually encouraged its Jewish population in various fields, including the literary circles. Growing interest in establishing a modern Arab Iraqi literature during the 1920s motivated the young educated Jews to participate in journalism and publication. This paper firstly analyses the historical background which inspired the Jewish intellectuals and deliberately strengthened their sense of belonging to Iraq. In order to shed light on the Jewish intellectuals' endeavors, this paper focuses on an Arabic literary weekly magazine "al-Misbah" which was published by some prominent Jewish figures of the time. While considering the retrospective nature of the scholarly discussion concerning the history of the Iraqi Jews in general, this paper attempts to clarify a part of the Jewish intellectuals' fluid identity.

Keywords:

Jews of Iraq, Anwar Shaul, historiography, publication, "al-Misbah"

1. はじめに

20世紀に入り中東地域は大きな転換点を迎えていた。その影響はイラク¹にかつて存在したユダヤ・コミュニティ²にも波及し、イギリスによる委任統治の開始やイラク王国の一応の成立などを経てイラクが「国家」としての在り方や「国民」の総意を模索する中で、ユダヤ人たちの間でも帰属意識の多様性が見られ始める。オスマン帝国解体以前のイラクは、モースル、バグダード、バスラという三つの州(wilāya)として統治されており、それぞれの連帯意識は希薄であった³。しばしば「人工国家」と形容されることから明らかなように、近現代イラクを論じる際には、その分断された社会や集合的アイデンティティの欠如が強調される例も見受けられる⁴。イラク社会の重層的な構造を分析検討したハンナ・バタートゥー(Hanna Batatu)は、「世紀(訳者註：19世紀から20世紀)の変わり目において、イラクの人々は一つの民もしくは一つの政治的共同体ではなかった」とし、これは単にイラクにおける民族的／宗教的少数派の存在を指しているわけではなく、多数派であるアラブ人においても、共通した特性を共有しているにもかかわらずその多くが「調和することのない、自分たちのことにしか関心がない、個々の社会の集積」であったと指摘する⁵。また、イラクの国家建設プロセスにみる集合的アイデンティティと歴史的記憶の継承に焦点を当て論じるエリック・デイヴィス(Eric Davis)も「19世紀半ば以前、イラクの住人たちは強固な集合的アイデンティティを共有してはいなかった」と述べている⁶。

このように、国民国家の基盤となるような自発的な連帯が存在したとは必ずしも言えないイラクであったが、20世紀初頭には青年トルコ革命やアラブ反乱に触発された若い世代が主導する、アラブ民族としての覚醒を伴うナショナリズムの萌芽が見受けられるようになった。アラブ地域におけるナショナリズムを論じる際には、一般にカウム主義(qawmiya)とワタン主義(waṭaniya)という二つの概念が用いられる。カウム主義(アラブ民族主義)は、アラビア語やその文化およびアラブの歴史を共有する、アラブ人としての民族的な連帯を重んじる民族主義である。一方、ワタン主義(本稿の場合、イラクー国国民主義)はそれぞれの国家が定める領域への帰属意識や祖国意識に基づく、国民主義と言うべきものである⁷。本稿が焦点を当てる1920年代から1930年代にかけてのイラクにおいてはこれら二つのナショナリズムが混在していた。この時期生まれた新しい世代の知識人らは、より包括的なイラク社会や国民の総意の形成のためには言論活動が不可欠だとし、新聞や雑誌といった定期刊行物を創刊するようになる。

こうした風潮の中、既に19世紀後半から西洋式の世俗教育を受けていたユダヤ人の中から、イラク社会における言論の場にアラビア語を用い参加する者が現れる。政治的な活動からは極力距離を置くことを慣習とし、コミュニティ内におけ

る生活を最優先しつつ必要に応じて周囲のムスリム社会との接触を図りながら一定の立場を維持してきたイラクのユダヤ・コミュニティにとって、これは画期的な出来事であった。このことは同時に、イラクのユダヤ人の一部が、同じ信仰を共有する宗教共同体に属する者としての「ユダヤ教徒」から、より世俗的な意味を含み持つ民族集団の一員「ユダヤ人」へと変化を遂げ始めたことも示唆している。イラクのユダヤ人らと西洋との邂逅およびそれに伴う世俗化／近代化は、コミュニティ内における独自の発展によるところが大きい。特に、全イスラエル同盟(Alliance Israélite Universelle, 以下アリアンス)による世俗教育の導入や、ヨーロッパのユダヤ・コミュニティとの繋がり、またヘブライ文字を用いた印刷・出版の伝統は重要な役割を果たしていた。

本稿で扱う 1920 年代以前にもユダヤ・コミュニティは既にイラク社会の繁栄、特にその経済的発展に寄与する重要な構成要素であった。1917 年の報告によると、当時バグダードには、アラブ系、トルコ系、その他のムスリム（ペルシア人とクルド人を除く）が 101,400 人、ペルシア人が 800 人、クルド人が 8,000 人、キリスト教徒が 12,000 人、そしてユダヤ教徒が 80,000 人居住していた。中東の歴史を専門とするシルヴィア・G・ハイム(Sylvia G. Haim)は、こうした統計は当てにならないとしつつも、均質な集団として明らかに最大規模であるという点を理由に、バグダードにおけるユダヤ・コミュニティの重要性を指摘している⁸。こうした背景が、後に限定的ではあったものの一部のユダヤ系知識人のあいだに「アラブ人」「イラク人」という自己認識を形成し、アラビア語言論の場に参加する動機を生み出したのである。

1990 年代から今日にかけて、近現代イラク史に対して修正主義的なアプローチを取る研究が発展しつつある。自身もその一翼を担うオリット・バシュキン(Orit Bashkin)は、こうした新たな潮流の特徴として、イラクの公共空間の「イラク的」性質及びその多元的な様相、そして印刷・出版市場に関わった多様な人物に重点を置くといった傾向を挙げている⁹。こうした動きに伴って、イラクのユダヤ人をめぐる研究にも新たな視点が持ち込まれるようになった。従来の研究は、多くの場合自身もイラク系の出自を持つユダヤ人研究者らによって担われてきた。彼らの主な関心はあくまでユダヤ・コミュニティとその歴史であって、ユダヤ系知識人を扱う際も、その役割や功績はユダヤ・コミュニティという枠内において論じられることが多かった。しかし昨今の研究は、イラクの公共空間における知識人一般の役割やその言論活動及び思想といった文脈にユダヤ系知識人を位置づけ再検討することで、新たな繋がりを見出しイラク社会の重層性を浮き彫りにしようとするアプローチに特徴づけられる。

本稿では、20 世紀以降イラク社会とユダヤ・コミュニティで並行して生じてい

た変遷に着目し、両者が交差する時期としての1920年代を取り上げる。イラク社会とユダヤ・コミュニティどちらの場合も、西洋の影響下で近代化／世俗化の過程をたどった点においては共通しているが、その動機や方向性、進度は必ずしも一致してはいなかった。そこで本稿では、まずイラク社会における新たな知識人層の出現と、より開かれた言論の場が形成された過程を整理する。次いで、同時期のユダヤ・コミュニティで後にイラク社会へ適応するような知識人が形成された背景を概観する。そうした上で、当時のユダヤ系知識人の自己認識や帰属意識が最も明確に象徴されていると考えられる、1924年に創刊されたアラビア語雑誌『ミスバーフ (al-Miṣbāḥ/ha-Menorah/灯火)』に焦点を当て、上述の二つの潮流の中に位置づけを試みる。先に述べたように、イラクのユダヤ・コミュニティをめぐる言説は書き手の歴史認識に左右されやすく、それぞれの研究が映し出すコミュニティの性質やそれに対する評価が大きく異なりがちである。この傾向は、ユダヤ系知識人や『ミスバーフ』をめぐる先行研究においても同様に見られる。これらの点を念頭に置き、1920年代のユダヤ・コミュニティとそれを内包するイラク社会との関係性を、ユダヤ系知識人とその活動を通して考察することで、イスラエル建国前のユダヤ人に見られた多様な自己認識や帰属意識の一端、および今日それを検討することが含み持つ問題点を提示することが本稿の主な目的である。

2. 20世紀初頭イラク社会とユダヤ人

2-1. 新しい知識人層の出現

かつてイラクにおける知的生活は、それぞれの宗教／宗派コミュニティ内において、主に伝統的な宗教知識人らによって担われていたが、20世紀を迎える頃にはその基盤が教育、技術的な専門知識、世俗的価値観へと移行しつつあった¹⁰。こうした変遷の根底にあったのは、世俗教育の普及である。バグダードにおける世俗的な公教育に本格的に着手したのは1869年にバグダードの知事となったミドハト・パシャ(Midhat Pasha, 1822-1884)であったが、彼の主な関心は軍人の養成にあったので、士官学校や職業学校は開校されたものの初等教育はなおざりにされていた¹¹。実際にバグダードに初等学校が設立されるのは1889年のことである。デイヴィスは、こうした教育改革は多様な少数派集団が既に展開させていた教育機関の存在に後押しを受けて起こったとする¹²。ユダヤ・コミュニティにおける最初の初等学校設立が1864年であったことと比べれば、オスマン帝国がバグダードで主導する世俗的公教育は確かに遅れを取っていたと言えるだろう。しかし、こうした体制側による改革の姿勢や青年トルコ革命に代表されるような周囲の政

治的変動は着実に社会全体の変容を促し、新たな中間層の形成に貢献した。しばしばエフエンディヤ(effendiyya)と呼ばれる、世俗教育を受けた都市部の中間層は、従来知的生産を担っていた宗教知識人や名望家らに代わる新たな知識人層の基盤となる¹³。

2-2. 国民意識の高まりと歴史認識の変化

一般にイラクにおけるナショナリズムは、その黎明期においては一部のスンニ派アラブ人旧オスマン軍人によって主導されていたアラブ民族主義が主流で、人口の上では多数派であったシーア派や、ユダヤ・コミュニティを含む少数派諸集団の総意を反映したものではなかった。そうした状況に変化が生じたのは1920年のことである。反英を掲げ1919年に設立された「独立防衛協会(Jam'īya Ḥaras al-Istīqlāl)」は、それまでのスンニ派主導の運動に対して、構成員の大多数がシーア派であるという点において異なっていた¹⁴。彼らが牽引した運動は、1920年に一大蜂起として結実することとなる。「1920年蜂起(Thawra al-'Ishrun)」と呼ばれるこの出来事¹⁵は、蜂起自体は鎮圧され失敗に終わったものの、イラク社会の公的空間に根本的な変容を促すきっかけとなった。デイヴィスはこの蜂起がもたらした二重の影響として、統合された国民意識という感覚を引き起こした点、またイラクの歴史においてそれまで見られることのなかったような方法でスンニ派とシーア派を協同させた点を挙げる¹⁶。加えて彼は、この蜂起で異なるコミュニティ間に団結を喚起する役割を果たした要素として、宗教的象徴に言及する。特定の過去、特にアラブ・イスラーム帝国黄金時代における諸宗教・諸宗派間の統一といった歴史へ目を向けることが、大衆をナショナリズムへ動員することを可能にしたというのである¹⁷。バシュキンはこうした歴史認識の傾向を「イスラーム的過去の世俗化」と呼び、これによって「イラクのユダヤ人が、自分たちにとってイスラームはナショナルかつ文化的な信念体系(belief system)であると主張できるようになった」と述べる¹⁸。このように、イラク社会の公的空間の性質が変化したことにより生み出された新たな歴史認識は、ユダヤ系知識人らが自らをアラブの歴史に関連付ける際の端緒となった。ユダヤ系知識人らの「アラブ人」という自己認識は、アラブ人アイデンティティの中核でもあったアラビア語を積極的に用いることでさらに強化された。このことが、当時開かれつつあった言論の場に彼らが「イラク人」として参入するための、一定の要件を満たしたのである。

3. イラクのユダヤ・コミュニティ

3-1. ユダヤ・コミュニティ独自の教育と知的交流

イラク、中でもバグダードで最も早い時期に世俗的な教育を始めたのは、ユダヤ教やキリスト教といった宗教少数派のコミュニティである。サーシャ・ゴールドシュテイン-サッバーフ(Sasha Goldstein-Sabbah)は、このような宗教的権威が運営する学校はナショナル・アイデンティティを形成する上で重要な鍵となったとし¹⁹、「宗教的／民族的(ユダヤ)意識を強固にした一方でナショナルな(もしくは公的な)意識も促進し、より大きな(非ユダヤ的)社会との繋がりを発展させる機能を果たした」とする²⁰。当時バグダードのユダヤ人が通っていた教育機関には、宗教的な学校、フランスのカリキュラムに則ったアリアンス、イギリスのカリキュラムに則ったシャマシュ校、政府が設立した学校などがあつたが²¹、中でもアリアンスは、イラクの言論空間で後に中心的な役割を果たすユダヤ系知識人を多数輩出した。アリアンスは、反ユダヤ的偏見に立ち向かいユダヤ人の権利を勝ち取ることを目的とし、1860年にパリで設立された。ユダヤ人が近代文明に統合されるためには道徳的かつ社会的再興を遂げ政治的権利を得るべきだとする啓蒙主義的な理念を掲げ、1862年にモロッコのテトゥアンに第一校目を開校、その後北アフリカから中東地域にかけて次々と学校を建設し、さまざまな慈善家からの寄付を得て20世紀半ばには中東イスラーム諸国におけるユダヤ・コミュニティのほとんどに進出していた。バグダードには1864年に初等学校が開校される。なお、授業はすべてフランス語でなされ、アラビア語もその科目の一つであつた²²。バシキンは、ユダヤ人らが「アラビア語をナショナル・アイデンティティの刻印として自らのものとしたことで、新たな時間と空間の概念が出現した」とし²³、アラビア語教育は「イラクの文化的領域に参加するための道具」を与えることになつたと述べている²⁴。

こうしたヨーロッパのユダヤ系組織による世俗的教育を通じた近代化推進の道のりは平坦ではなかつたようだ。ニッسيم・レジュワーン(Nissim Rejwan)は、アリアンスによって最初の学校がバグダードに開校された際、ユダヤ教宗指導者層の大きな反感を買い閉校を余儀なくされ、1872年に再開されたと述べている²⁵。その際、当時イラクのユダヤ・コミュニティにおける宗教的権威の中でも最もリベラルであつたラビ、アブダッラー・ソメフ(‘Abdallah Somekh)は、自らの息子をアリアンスに通わせることによって、アリアンスに対して懐疑的であつた、バグダードの保守的なユダヤ教徒らに先例を示した²⁶。しかし一方で、同時代のユダヤ人ハールーン・ダーウッド・ショヘット(Haron Da’ud Shoḥet)による1910年の報告²⁷は、「首席ラビは単なる代弁者である。彼はトルコ当局に対しても自分のコミュニティのメンバーに対しても、いかなる実際的な影響も行使していない」、

「過去と対比すると、聖職者らは信仰を共有する同胞らに対していかなる影響力も持っておらず、このことの原因はコミュニティの諸層に普及した教育の結果によって生じたと確信をもってみなすことができよう」と伝えている。このことは、当時のユダヤ・コミュニティ内における世俗的／近代的な価値観の受容は宗教指導者層の権威の失墜と連動していたことを示唆していると言えよう²⁸。

アリアンスの果たした役割に疑問の余地はないが、それに加えバグダードのユダヤ人は外部世界を知るための他の繋がりも有していた。例えば、他都市で発行されたヘブライ語出版物、特に新聞雑誌といった定期刊行物の流入が挙げられる。実際に 1860 年代には既にヨーロッパ、エレッツ・イスラエル、イギリス、アメリカなどからヘブライ語の定期刊行物がバグダードへと届いていたという²⁹。エリ・ケドゥーリー(Elie Kedourie)は、1869 年から 1880 年にかけてバグダードに居住していたオーストリアのユダヤ人の証言として、マインツで発行していた『ハレバノン(ha-Lebanon)』やケーニヒスベルクで発行していた『ハマギド(ha-Magid)』といった定期刊行物は既にバグダードで知られており、後者に至っては 20 ほどの購読者もおり、数百人規模のバグダードのユダヤ人らに読まれていた、という報告に触れている³⁰。

この例のみならず、当時バグダードには一定数のヨーロッパ出身ユダヤ人がおり、中にはそのまま所帯を持ち定住する者もいた。後に触れるアンワル・シャーウール(Anwar Shā'ūl)の祖父も、19 世紀の半ばにオーストリアからバグダードへとやって来たユダヤ人の一人である³¹。一方で、バグダードからヨーロッパ諸国へ赴き高等教育を修める者も、少ないながらも存在した。オスマン帝国末期に高官として重要な役割を果たすバグダード出身のユダヤ人サッスーン・ヘスケル(Sassoon Heskell, 1860-1932)は、アリアンスを卒業後、ウィーン、パリ、ロンドンで学び、ドイツ語を身に付け帰国した人物である³²。このような直接的なヨーロッパの経験に加え、インドにおけるバグダード出身ユダヤ人のコミュニティが果たした役割も少なくない。17 世紀後半には既にカルカッタやボンベイに進出していたバグダード出身のユダヤ人らは、イギリスが強い影響を誇っていたインドにおいて、バグダードにいる同胞らよりも早い時期に数々の科学技術に遭遇し、従来の宗教的生活様式との間に折り合いをつける必要性に迫られていた。例えば、安息日に鉄道に乗ることの可否といった問題がそうである。こうした問題に関して、書簡を通じアドバイスを求められたアブダッラー・ソメフは、列車が動く仕組みや運行のシステムを書簡の詳述によって把握し、ヨーロッパで既に発されていた宗教的解釈を参照しつつ解決策を提示していたという³³。イラクのユダヤ・コミュニティと西洋との接触の機会は、こうした広範にわたるユダヤ・コミュニティの繋がりを通してもたらされた部分が大きかった。

3-2. イラクのユダヤ人と印刷・出版

オスマン帝国末期までのバグダードのユダヤ人は、政治への関与を控えるという伝統的な姿勢を貫いていたことから、基本的には印刷・出版といった活動からも距離を置いていたが³⁴、コミュニティ内で用いる聖書の翻訳や祈祷書といった書籍に関しては例外であった。18世紀から19世紀にかけて、こうした書籍の印刷・出版は、手書きの原稿をイスタンブールに送り印刷するのが常であった³⁵。19世紀の後半からバグダードでユダヤ人による印刷が始まってからも多くのラビたちの書籍が、ヴィルナ、ウィーン、リヴォルノ、エルサレムといった諸都市で印刷され続けていた³⁶。また、インドにおけるバグダード出身ユダヤ人のコミュニティでも、ヘブライ文字の印刷・出版が活発になされていた。イツハク・アビシユール(Yitshak Avishur)によると、バグダードのユダヤ人はインドにて初めて印刷という技術に触れ³⁷、そこで1840年代には既にヘブライ文字を用いた印刷所を設立していたという³⁸。このように近現代のイラク、特にバグダードのユダヤ人と印刷・出版をめぐる活動は、バグダードやイラクといった地理的領域内に限られたものというよりは他地域のユダヤ・コミュニティとの繋がりの上で発展したものであった。

バグダードのユダヤ人らが自ら印刷を始めるのは、1860年代のことである。大半が信仰や伝統に関連する書籍であったことから、印刷に使われる活字はヘブライ文字であった。1863年バルーフ・モシエ・ミズラヒー(Barukh Moshe Mizrahi)はリトグラフを用いた印刷所を開き³⁹、不定期発行のヘブライ語紙『ハドベル(ha-Dover)』を創刊、1868年までに17号が発行された⁴⁰。次いで1866年に、ラハミーム・ベン・ルーベン・ベン・モルデハイ(Raḥamim ben Reuven ben Mordekhai)が初の活版印刷機を用いた印刷を始める。バグダードにおける3軒目の印刷所は、1888年シュロモ・ベホール・フーツィン(Shlomo Bekhor Hutsin)によって設立される。彼は印刷所設立にあたって活字をリヴォルノから注文していた。その後1904年に設立されたエズラ・ルーベン・ダングール(Ezra Reuven Dangur)の印刷所は、編集も手掛けていたという点において他の3軒とは異なっていた。印刷機や活字はヨーロッパから輸入していたという。1930年まで続くダングールの印刷・出版社は、創業以来バグダードにおいて最も生産性の高い印刷所であったといい⁴¹、アラビア文字での印刷も手掛けていた⁴²。イラクにおけるユダヤ・コミュニティの通史を著したアブラハム・ベン・ヤアコブ(Avraham ben Ya'akov)は、1863年以降バグダードのユダヤ系印刷所で印刷・出版された本は、400冊を上回るとしている⁴³。

より顕著なナショナリズムの表出が見られるようになった1920年代のイラクにおいて最も影響力を発揮したのは、規模を広げつつあった印刷・出版分野であっ

た。当時新聞や雑誌といった定期刊行物は増加の一途を辿り、1920年から1929年にかけては、少なくとも105紙の新聞が創刊されたという⁴⁴。バシュキンによると、1937年の時点で27あったイラクの印刷・出版者のうち、6軒がユダヤ人によって所有されており、その後も1945年までにさらに2軒増加したという⁴⁵。イラクのユダヤ人らによる定期刊行物発行への関心が高まったのは、1908年の青年トルコ革命直後であり⁴⁶、このことはイラク社会全般において革命直後から1914年にかけて多くの新聞が創刊されたという傾向と合致している⁴⁷。ユダヤ・コミュニティにおいては、アラビア語とトルコ語併記の新聞3紙が創刊されたもののいずれも数号発行した後に発刊停止となった。その後オスマン帝国末期にかけて、ユダヤ人による印刷・出版活動は次第に終息していく⁴⁸。

4. ユダヤ系知識人とアラビア語定期刊行物

4-1. 『ミスバーフ』

一度は興隆の兆しがみられたものの短命に終わったイラクのユダヤ人による定期刊行物出版への動機が再び高まるのが、1920年代の前半である。中でも、最も象徴的な雑誌が、『ミスバーフ』であった。1924年から1929年にかけてバグダードで発行されていたユダヤ系知識人による本格的なアラビア語雑誌の嚆矢であるこの雑誌は、自らを「文学的、科学的、社会的な雑誌」と定義していた。発行許可保持者であり責任者であったユダヤ人サルマーン・シーナ(Salmān Shīnā, 1899-1978)のもと、1924年4月10日の創刊号から1925年2月4日までは、当時のユダヤ系知識人を代表する存在であったアンワル・シャーウールが編集者を務めていたが、その後シーナに取って代わられる。編集者の交代を境に、紙面はシーナ自身の意向を反映し、よりシオニズム的内容に傾倒したものになったとされている⁴⁹。

1924年4月10日から1926年9月まで、毎週木曜日全112号を定期的に発行し続けたが、発刊停止となる1929年までは散発的に15号しか発行されていない。文学雑誌を自負することからもわかるように、紙面には若きユダヤ系知識人らによるアラビア語詩や短編小説に加え、当時イラクで注目を集めていた非ユダヤ系知識人らによる作品や西洋諸文学からの翻訳が積極的に掲載されていた。またイラク社会が直面する諸問題についての論考、各地のユダヤ・コミュニティに関するニュースも掲載されている。その表紙上部中心には、「灯火」を意味する誌名「ミスバーフ」がアラビア語で書かれており、すぐ下には同じ意味を有するヘブライ語の単語「ハメノラ」も書き添えられている。発行年月日はヒジュラ暦、ユダヤ暦、グレゴリオ暦と、三つの暦に従って記されている。シャーウールは、自身が

編集者を務めていた期間、ペンネームとして「イブン・サマウアル (ibn Samaw'al)」を用いていた。これは、ジャーヒリーヤ時代のアラブ人詩人でユダヤ教徒であった「サマウアル・イブン・アーディヤー(al-Samaw'al ibn 'Ādiyā')」⁵⁰からとられたものである。

アンワル・シャーウールは、詩人、短編小説作家、劇作家、ジャーナリスト、翻訳家、と文脈によって様々な肩書が付記される、当時最も積極的に活動していたユダヤ系知識人の一人である。1904年、イラク中部ヒッラに生まれ、1914年に家族と共にバグダードへ移る。どちらの都市においてもアリアンスで教育を受け、その経験は後にアラビア語を駆使しイラクの言論の場で活躍する際の基礎となった。ユダヤ系の学校にてアラビア語の教師として働きつつ、同時にバグダードの法科大学に学び、卒業後は政府関連の役職に就いたシャーウールは、1920年代からアラビア語の短編小説や詩の執筆を始め、それらは度々『ミスバーフ』に掲載されていた。また、1930年に自身の短編小説集を出版し、1937年には自ら翻訳した諸外国の短編小説のアンソロジーを編むなど、イラク社会に対して積極的に発信を行う人物であった。シャーウールは、1950年代初頭にイラクのユダヤ・コミュニティのほとんどがイスラエルへと移住した後も、最終的に1971年までイラクに留まり続けた数少ないユダヤ系知識人の1人である。イスラエルに移住後も、アラビア語での執筆を続けた⁵¹。

4-2. 先行研究と評価

アリーヌ・シュレイファー(Aline Schlaepfer)が、「1924年において、ユダヤ系知識人の可視性は新しい現象であった」と述べるように⁵²、同年における『ミスバーフ』の創刊がユダヤ・コミュニティにとって前例のない出来事であったという点において、先行研究は一致している。しかし、『ミスバーフ』がもたらした「新しさ」の解釈は様々である。例えばルーベン・スニール(Reuven Snir)は、イラク社会の一員として意見を発信しアラブ文学／文化の発展に貢献しようという、シャーウールに代表されるような1920年代のユダヤ系知識人らが言明した価値観を「アラブ的文化展望(ha-hazon ha-tarbuti ha-'arabi)」と呼ぶ⁵³。そして、編集者がシャーウールからシーナへ交代した後、編集方針に著しい変化がみられることを認めつつも、特にシャーウールが編集者であった期間『ミスバーフ』は「イラクにおけるすべての宗教の構成員に共有されるアラブ的文化展望の萌芽を醸成する役割を果たしていた」と述べ⁵⁴、雑誌名の二言語表記や三つの暦が併記されている点について、同じ祖国の兄弟であるムスリム、ユダヤ人、クリスチャンとの間に共通点を創出する試みを示唆しているとし⁵⁵、この雑誌が基本的にはイラク社会全体を視野に入れていたという前提で議論を進める。またシャーウールが自

身のペンネームとしてイブン・サマウアルを使用したことに言及し、1920年代イラクのユダヤ人が自身をジャーヒリーヤ時代のユダヤ教徒詩人の継承者として見ていたという事実は、「現在の必要性に対応させて過去を構築するという試み」であり、この雑誌の歴史認識を表しているとする⁵⁶。こうしたスニールの評価に則ると『ミスバーフ』は、冒頭で述べたようなイラク社会における歴史認識をめぐる動きと軌を一にしていたと言えるだろう。

一方、『ミスバーフ』は「ユダヤ人に向けられた敵意に満ちた雰囲気に対する、ユダヤ・コミュニティの表現手段(kle bitui)」として知られていたとするニッسيم・カッザズ(Nissim Kazzaz)は⁵⁷、この雑誌を、反ユダヤ的風潮からユダヤ・コミュニティを守るための自衛の道具として位置づけ論じている⁵⁸。『ミスバーフ』創刊という出来事を「指導者層の方針における変化(shinuyi be-'emdat hanhagah)の始まり」⁵⁹とするカッザズは、ユダヤ・コミュニティの指導者層がイラク社会における変化に対応するため採用した同化を重んじる一方針を「イラク志向(ha-orientatsiyah ha-'irakit)」と呼び⁶⁰、『ミスバーフ』がこの方針を推進するための場であったと位置づけている。また、ユダヤ系知識人らがイラクのナショナリズムを奨励するような記事を書いていることに触れつつも、この雑誌はコミュニティ指導者層にとって「イラクの世論を極端な者たちの手中に委ねたままにしないための道具」であったとし⁶¹、ユダヤ人によるユダヤ人のための言論の場という役割を強調している。これは、『ミスバーフ』が積極的にイラク社会との共通点を見出そうとしていたとするスニールの評価とは異なる。

5. 結びにかえて

先行研究に見られる『ミスバーフ』の異なる位置づけや評価は、アラブ的性質を軸とするイラク社会の一員である、という帰属意識⁶²が当時のユダヤ・コミュニティ内でどの程度共有されていたのか、共有されていたと仮定する場合、それは実感を伴った自発的なものであったのか、それともユダヤ・コミュニティの指導者層による方針の影響であったのか、という問題における見解および歴史認識の差から生じていると言えよう。つまり、ユダヤ系知識人と同時代のイラクにおける知識人一般との繋がりに着目するスニールにとって、『ミスバーフ』創刊へとユダヤ系知識人を駆り立てた動機は「アラブ的文化展望」と称すべきものであったが、一方でユダヤ・コミュニティが周辺との緊張関係を保ち存続してきたという歴史認識に軸足を置くカッザズにとっては、コミュニティ維持のための一方針「イラク志向」と称すべきものであった、ということである。

スニールは「1940年代末までイラクのユダヤ系知識人たちの多くは、イラクが

彼らの祖国(moledet)であり、イラクを除いて他になく、それゆえにユダヤ人はその構築と文化的発展に参画しなければならないという認識を継承していた」とする⁶³。そうした上で、教育者であり翻訳や文学作品執筆も手掛けていたエズラ・ハッダード(‘Ezra Ḥaddād, 1903-1972)による1930年代末の言葉「我々はユダヤ人である前にアラブ人である(naḥnu ‘arabun qabla an nakūna yahūdan)」⁶⁴を取り上げる。スニールはこうしたハッダードの発言は何ら不思議なことではないとし、『ミスバーフ』発刊停止後も少なくともユダヤ系知識人らの間には、「アラブ的文化展望」が自明のものとして根付いていたという見解を示している⁶⁵。一方『ミスバーフ』の発刊停止が、バグダードのユダヤ人たちにとっての「愛国主義的、反ユダヤ主義的影響に対する闘争手段」の喪失であり、「イラク志向」の支持者にとっての「イラク愛国主義を説明、強化、促進する手段」の喪失であったとするカッザズは、『ミスバーフ』の発刊停止に「イラク志向」という方針自体の不成功を重ね合わせる⁶⁶。

それが「アラブ的文化展望」であったのか「イラク志向」であったのかという問題以前に、実際に1920年代のユダヤ人らはどのような集合であったのだろうか、何に対して帰属意識を持っていたのだろうか。ここで冒頭で引用した同時代人ショヘットによる1910年の報告に再び目を向けたい。この報告によると、当時ユダヤ人の5%が「裕福で不自由のない階級」である商人や銀行員、30%が「中流階級」で小規模の貿易商、小売業の経営者そして被雇用者、60%が「貧困層」そして5%が「物乞い」であったという⁶⁷。ハイームは、こうした状況は第一次世界大戦から1917年頃まで続いたものの、経済条件は着々と改善され教育システムもそれに後れを取ることなくより広範に普及しつつあったとしているが⁶⁸、この数字だけを見ると、1920年代初頭においてもユダヤ・コミュニティ内部ではその生活水準にまだ格差があったことが予想される。またレジュワーンはイギリスの委任統治開始からファイサル1世が死去する1933年までの期間におけるユダヤ・コミュニティについて「程度の差こそあれ、干渉を受けることなく自分たち自身の経済、社会、教育における発展に取り組んでいた。そして政治に手を出すとしてもそれは見せかけだけであった」と述べる⁶⁹。

一方数少ない同時代の非ユダヤ系知識人による記録として⁷⁰、キリスト教徒でありながらもアリアンスに学んだイラクの歴史家で、後に財務大臣を務めたユースフ・リズクッラー・ガニーマ(Yūsuf Rizq Allah Ghanīma, 1885-1950)による、イラクのユダヤ・コミュニティの歴史に関する著作がある。『ミスバーフ』創刊と同じ1924年にこの本を出版したガニーマは、「…彼ら(訳者註：ユダヤ教徒)は、キリスト教徒たちのように、できる限りナショナルな連帯(al-ikhā’ al-waṭanī)の内に、ムスリムであるところの祖国の人々(abnā’ waṭanihim)と共に生きている」と記し

ている⁷¹。また、シャーウールはイスラエルへ移住後に綴った自伝の、アリアンスでの経験と自身の成長に言及する箇所で「…高潔な一人のイラク市民(muwāṭinan)、そして自らのユダヤ性(yahūdīyatīhi)に忠実で、それを誇りに思う一人のユダヤ人(yahūdīyan)を打ち立てることができた」と回想している⁷²。この言葉は、当時のシャーウールにとって、イラク人であることとユダヤ人であることは矛盾せず、同時に成立させることが可能であったことを示唆している。自身もイラク出身ユダヤ人であるヌズハット・カツァヴ(Nuzuhāt Qatsav, 1932-)は、ハッダードの死後出版された追悼文集で、シャーウールのイスラエル移住に際し開かれた集まりにてハッダードが語った以下のようなエピソードを記している。

その夜話題になった思い出や共有された話の中で最も感慨深いものは、1924年にエレッツ・イスラエルよりバグダードへ届いた招待状の話であった。これは、ヘブライ大学創立に際しての招待であった。エズラと彼の友人である詩人のアンワル・シャーウールは、どのようにこの歴史的な重要行事に参加を表明するべきか相談をした。そして思いついたのが、エレッツ・イスラエルへの慕情、同胞への希望と切望そして感謝と平和を織り交ぜた祝福の詩を発送するというアイデアであった。二人は、シオンへの愛と思慕を伝えるようなシンボルをもって、祝辞を美しく装飾することに決めた。そのシンボルは、ダビデの星はもちろんのこと、反対側には、共生と平和への強い期待を意図して、イラクの国旗の絵を装飾として用いた。エズラは、その詩をあるアラブ人の友人の所へ持ち込んだ。その友人は、教育者でもあり、よく知られた装丁家でもあった。彼が、その詩を特別な筆致で飾り、これらのシンボルを描いた。その後、二人はこの詩をエレッツ・イスラエルへと送ったのだ⁷³。

カツァヴのエピソードは、アラビア語を用いるイラク人として執筆していた当時のシャーウールやハッダードが、ユダヤ・コミュニティの一員として同時にエレッツ・イスラエルにも感情的繋がりを持つことが可能であったという事実を、具体的に示していると言えよう。

1948年のイスラエル国家建国後に形成されたシオニストの歴史認識は、ディアスポラのユダヤ人は常に迫害の危険に曝されていたので、ユダヤ民族の国家を希求することや、シオニズム運動の発生および最終的なイスラエルへの移住は当然の帰結であったとする。こうした歴史認識は、建国前のユダヤ・コミュニティをめぐる今日の歴史叙述と不可分の関係にある。スニールは、イラクを含むアラブ諸国のユダヤ・コミュニティの歴史において「シオニスト・ナラティブとの関係、過去に関する集合的記憶の問題、現実にかきた出来事の境界が（それら出来事の

跡を辿り、現在に提示することができる限りそれは「真実」であるとするように）曖昧にされるという問題」が未だ十分に検討されていないという点を指摘しているが⁷⁴、本稿で取り上げた1920年代イラクのユダヤ・コミュニティをめぐっても、イスラエル国家の現実を過去に投影することで起きるこうした問題の一部が顕著に現れていると言えよう。

昨今見られる、イラクの公共空間を考察する際の新しい視点はこうした問題を顕在化させることに著しく貢献しているが、それに加えて、当時イラクのユダヤ人らが維持していたユダヤ人としての自己認識やユダヤ・コミュニティへの帰属意識を、シオニストの歴史叙述に取り込まれることなくどのように位置づけることができるのかという点も、このテーマについて研究を進める上で課題となってくるだろう。シャーウールという特定の人物に着目すると、イラク社会とユダヤ・コミュニティの間を緩やかに行き来する、国家イラクの国民としての在り方、そして世俗的な社会に生きる近代のユダヤ人としての在り方どちらもが垣間見える。『ミスバーフ』は、イラクにおける萌芽期のナショナルな集合的アイデンティティと、過渡期にあったユダヤ・アイデンティティ、双方を詳らかにするために不可欠な同時代的視点を提供する貴重な資料であると考えられる。本稿で明らかになった問題点を指標とし、今後はさらに内容面についての考察を深めていきたい。

推薦者：アダ・タガー・コヘン
同志社大学神学部神学研究科教授

註

*本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（研究課題／領域番号：16J06061）の成果の一部である。

¹ al-‘Iraq という単語は、大河の岸とそれに沿って広がる牧草地を意味しており、少なくとも8世紀にはアラブ人地理学者らによって、ティグリス・ユーフラテス川の広大な沖積平野を指す言葉としてこの単語が使われていたという。Charles Tripp, *A History of Iraq*. 3rd Edition. (Cambridge: Cambridge University Press, 2007), p. 8.

² 第一次世界大戦前イラクのユダヤ人口は80,000人で、うち50,000人はバグダードやその周辺に居住しており、加えて南部に小規模なコミュニティが幾つか存在した。北部のユダヤ人は村や小規模な町に居住しておりそのほとんどが農業に従事していた。モースル、バグダード、バスラは最も規模の大きいコミュニティで、当時のユダヤ人口の約74%がその三都市に居住していたという。Peter Wien, *Iraqi Arab Nationalism: Authoritarian, Totalitarian and Pro-Fascist Inclinations, 1932-1941* (London: Routledge, 2006), p. 43. 1947年の国勢調査に基づくイラクの公式統計は、イラクのユダヤ人口が、

全人口 4,500,000 人の 2.6%である約 118,000 人に達していたとするが実際はそれ以上であったとする研究もある。1940年代後半にユダヤ人口は 135,000 人に達していたが、1948 年から 1951 年にかけて 123,500 人がイスラエルへ移民し、約 6,000 人がイラクに留まったという。Abraham Ben-Yaacob and Hayyim J. Cohen / Nissim Kazzaz (2nd ed.). "Iraq," *Encyclopaedia Judaica*. 2nd Edition (Michigan: Thomson Gale, 2007), vol. 10, p. 16. イラクのユダヤ・コミュニティ一般に関しては以下を参照。Avraham Ben-Ya'akov, *Yehude Bavel mi-Sof Tkufat ha-Geonim ad Yamenu 1038-1960* (Yerushalayim: Kriyat Sefer, 1979); Norman A. Stlilman, *Jews of Arab Lands: A History and Source Book* (Philadelphia: Jewish Publication Society, 1998); Nissim Rejwan, *The Jews of Iraq: 3000 years of History and Culture* (Kentucky: Fons vitae, 2009).

³ バタートゥーは、都市間の物理的な繋がりが緩く希薄であったことに言及し、その要因として交通・通信手段が確立されていなかったことに触れつつ、主要三都市には異なる経済的方向性があったとする。具体的には、モースルはシリアやトルコとの、バグダードやシエラ派聖地はペルシアや西部および西南部に広がる砂漠地帯との繋がりをもち、そしてバスラは主にインドへと繋がる海を見据えていたとする。Hanna Batatu, *The Old Social Classes and the Revolutionary Movements of Iraq* (Princeton: Princeton University Press, 1978), p. 16.

⁴ 分析枠組みとしての宗派主義とその根拠として度々言及される、イラクが「人工国家」であるという主張をめぐる議論に関しては、以下に詳しい。山尾大・浜中新吾「宗派主義という隘路：イラク世論調査に見る政党支持構造の分析を手掛かりに」『中東学会年報』30(1)、2014年、1-32頁。

⁵ Batatu, *op. cit.*, p. 13. バタートゥーはここでクルド人、トルクメン人、ペルシア人、アッシリア教徒、アルメニア教徒、カルデア教徒、ユダヤ教徒、ヤズィード教徒、サービア教徒を挙げている。

⁶ Eric Davis, *Memories of State: Politics, History, and Collective Identity in Modern Iraq* (California: University of California Press, 2005), p. 31.

⁷ 酒井啓子「中東・アラブ世界における民族主義と宗教」『民族主義とイスラーム—宗教とナショナリズムの相克と調和』アジア経済研究所、2001年、62頁; Orit Bashkin, *New Babylonians: A History of Jews in Modern Iraq* (California: Stanford University Press, 2012), pp. 15-16.

⁸ Sylvia G. Haim, "Aspects of Jewish life in Baghdad under the Monarchy," *Middle Eastern Studies* 12:2 (1976), p. 188.

⁹ Orit Bashkin, *The Other Iraq: Pluralism and Culture in Hashemite Iraq* (California: Stanford University Press, 2009), p. 14. なおバシユキンは代表的な例として本稿でも度々触れるエリック・デイヴィス(Eric Davis)やピーター・ウィーン(Peter Wien)らの研究を挙げている。

¹⁰ Davis, *op. cit.*, p. 41.

¹¹ *Ibid.*, p. 34.

¹² *Ibid.* バグダードにおける最初のこうした類の教育機関は、1728年にカルメル派の宣教活動が設立したものであった。

- ¹³ Michael Eppel, “Note about the Term Effendiyya in the History of the Middle East,” *International Journal of Middle East Studies*, 41:3 (2009), pp. 535-539.
- ¹⁴ Tripp, *op. cit.*, p. 40
- ¹⁵ この蜂起に関しては、以下を参照されたい。酒井啓子「イラクにおける国家形成と政治組織（1908~20年）」『国家・部族・アイデンティティ：アラブ社会の国民形成』アジア経済研究所、1993年、79-142頁；Tripp, *op. cit.*, pp. 39-43; Davis, *op. cit.*, pp. 29-54.
- ¹⁶ Davis, *op. cit.*, p. 47.
- ¹⁷ *Ibid.*, p. 53.
- ¹⁸ Bashkin, *New Babylonians*, pp. 27-28.
- ¹⁹ S. R. Goldstein-Sabbah, “Jewish Education in Baghdad: Communal Space vs. Public Space,” in *Modernity, Minority, and the Public Sphere: Jews and Christians in the Middle East* (Leiden: Brill, 2016), p. 96.
- ²⁰ *Ibid.*
- ²¹ *Ibid.*, pp. 98-99.
- ²² Aron Rodrigue, “Alliance Israélite Universelle,” *Encyclopedia of Jews in the Islamic World*, (Leiden: Brill, 2010), vol. 4, pp. 171-180.
- ²³ Bashkin, *New Babylonians*, p. 25.
- ²⁴ *Ibid.*, p. 126.
- ²⁵ Rejwan, *op. cit.*, p. 185.
- ²⁶ Zvi Zohar, *Rabbinic Creativity in the Modern Middle East* (London: Bloomsbury, 2013), p. 90; Reuven Snir, *Araviyut, Yahadut, Tsiyonut: Mabaq Zehuyot be-Yetsiratam shel Yehude ‘Iraq* (Jerusalem: Makhon Ben Tsvi, 2005), p. 11.
- ²⁷ この報告書は、1910年2月27日、イギリスの総領事 J. G. ロリマー(J. G. Lorimer)がいくつかの注記を付けコンスタンティノーブルへと発送したものである。報告書に記された日付は2月17日であり、H. D. S. との署名がある。中東を専門とする歴史家で、自らもイラク出身ユダヤ人であるエリ・ケドゥーリー(Elie Kedourie)は、この署名および報告は、当時イギリス総領事館の通訳者(dragoman)であったハールーン・ダーワード・ショヘット(Haron Da’ud Shoḥet)によるものだとし、ユダヤ・コミュニティをその内部から観察したという点において、意義深いとする。Elie Kedourie and H. D. S., “The Jews of Baghdad in 1910,” *Middle Eastern Studies* 7:3 (1971), p. 355.
- ²⁸ Kedourie, *op. cit.*, p. 358.
- ²⁹ Rejwan, *op. cit.*, p. 200.
- ³⁰ Kedourie, *op. cit.*, p. 356.
- ³¹ Sasson Somekh (25.02.2003), Baghdad, Etmol: ‘al Shne Yehudim sheHitgalgelu me-Yinah le-Baghdad be-Meah ha-19. Haaretz, URL: <https://www.haaretz.co.il/misc/1.864634> (参照日：2018年8月25日)
- ³² Reuven Snir, ““Religion Is for God, the Fatherland Is for Everyone”: Arab-Jewish Writers in Modern Iraq and the Clash of Narratives after Their Immigration to Israel,” *Journal of American Oriental Society*, 126:3 (2006), p. 380; Rejwan, *op. cit.*, p. 213.
- ³³ Zohar, *op. cit.*, chap. 2.
- ³⁴ Nissim Qazzaz, ““Itonim ve-‘Itonaim Yehudim be-‘Iraq,” *Kesher* 6 (1989), p. 68.

- ³⁵ 劣悪な輸送条件下における遠隔地への発送は、多くの貴重な写本の紛失を引き起こした。Ben-Ya'akov, *op. cit.*, p. 309.
- ³⁶ *Ibid.*
- ³⁷ 商業上の理由から 17 世紀後半にはバグダードやバスラからインドへの移住者がみられたが、定住化が進むのは 19 世紀になってからである。その人口は、1903 年の時点で 5,000 人にのぼった。特に、1828 年から 1829 年にかけて起きるマムルーク朝のダワード・パシヤによるユダヤ人迫害をきっかけに、バグダードの富裕層の一部がインドへと移住することとなった。以下に詳しい。Yitshaq Avishur, “Sifrut ve-‘Itonut be-‘Arabit-Yehudit shel Yehude Bavel be-Dapse Hodu,” *Pe’amim*, 52 (1991), p. 101.
- ³⁸ ボンベイとカルカッタのバグダード出身ユダヤ人コミュニティにて印刷所が設立されたのは同じ時期で、1841 年だったという。しかし実際にユダヤ・アラビア語にて書籍や新聞が印刷され始めるのはボンベイで、1856 年のことであった。Avishur, *op. cit.*, p. 102.
- ³⁹ エレツ・イスラエルで最も古いヘブライ語紙「ハレバノン(ha-Lebanon)」が発刊されたのと、同じ年のことである。Ben-Ya'akov, *op. cit.*, p. 310.
- ⁴⁰ なお 19 世紀に、後にイラクとなるモースル、バグダード、バスラの三州で創刊された新聞は 4 紙だけであったという。Davis, *op. cit.*, p. 38.
- ⁴¹ Rachel Simon, “Printing and Printers,” *Encyclopedia of Jews in the Islamic World*, (Leiden: Brill, 2010), vol. 4, pp. 106-107.
- ⁴² Bashkin, *The Other Iraq*, p. 187.
- ⁴³ Ben-Ya'akov, *op. cit.*, p. 313.
- ⁴⁴ Davis, *op. cit.*, p. 49.
- ⁴⁵ Bashkin, *op. cit.*, p. 187.
- ⁴⁶ それ以前も、上に挙げた「ハドベル(ha-Dover)」や、国外のユダヤ系新聞への寄稿、またインドのイラク出身ユダヤ・コミュニティ内での定期刊行物発行などは見受けられるものの、19 世紀のバグダードのユダヤ人の間には、ユダヤ系新聞はなかった。Kazzaz, *op. cit.*, p. 68.
- ⁴⁷ 61 紙が創刊されたという。Davis, *op. cit.*, p. 38.
- ⁴⁸ Rachel Simon, “Jewish Journals in the Islamic World,” *Encyclopedia of Jews in the Islamic World*, (Leiden: Brill, 2010), vol. 5, pp. 24-25; Kazzaz, *op. cit.*, p. 69; Ben-Ya'akov, *op. cit.*, p. 306.
- ⁴⁹ シーナは、1924 年の創刊時、既に世界シオニスト機構に情動的支援と、在イラクの東インド会社へと配慮を求める嘆願を送っていたという。Orit Bashkin, “Misbāḥ (Baghdad), al-,” *Encyclopedia of Jews in the Islamic World*, (Leiden: Brill, 2010), vol. 1, pp. 430-431.
- ⁵⁰ 6 世紀のアラビア半島にいたとされるユダヤ教徒の詩人であり、その忠誠心を示す逸話から「サマウアルよりも忠実な(awfā min al-Samaw'al)」というアラビア語の慣用表現で知られている。Thomas Bauer, “Al-Samaw'al b. ‘Ādiyā,” *The Encyclopedia of Islam*, New Edition (Leiden: Brill, 1995), vol. 8, pp. 1041-1042.
- ⁵¹ シャーウールについては以下に詳しい。Reuven Snir, “Shā’ūl, Anwar,” *Encyclopedia*

-
- of Jews in the Islamic World*, (Leiden: Brill, 2010), vol. 4, pp. 350-351; Wien, *op. cit.*, pp. 43-51; Nancy E. Berg, *Exile from Exile: Israeli Writers from Iraq* (New York: SUNY Press, 1996), pp. 31-35.
- ⁵² Aline Schlaepfer, “Between Cultural and National Nahda: Jewish Intellectuals in Baghdad and the Nation-Building Process in Iraq (1921-1932),” *Journal of Levantine Studies* 1:2 (2011), p. 63.
- ⁵³ Snir, *Araviyut, Yahadut, Tsiyonut*, p. 12.
- ⁵⁴ *Ibid.*, p. 26.
- ⁵⁵ *Ibid.*, p. 415.
- ⁵⁶ *Ibid.*
- ⁵⁷ Kazzaz, *op. cit.*, p. 69.
- ⁵⁸ *Ibid.*
- ⁵⁹ *Ibid.*
- ⁶⁰ *Ibid.*, p. 70.
- ⁶¹ *Ibid.*, p. 69.
- ⁶² 体系的にこの「アラブ・ユダヤ(Arab Jew)」を論じたイエフダ・シェンハヴ(Yehouda Shenhav)の著作や、関連して「ユダヤ・アラブ(Judeo-Arabic)」というハイフンで結ばれた概念を論じたエラ・ショハット(Ella Shohat)の以下の研究も参考にされたい。
Yehouda Shenhav, *The Arab Jews: A Postcolonial Reading of Nationalism, Religion and the Ethnicity* (California: Stanford University Press, 2006); Ella Shohat, “The Invention of Judeo-Arabic,” *Interventions: International Journal of Postcolonial Studies*, 19:2 (2017), pp. 153-200.
- ⁶³ Snir, *op. cit.*, p. 77.
- ⁶⁴ Rejwan, *op. cit.*, p. 219.
- ⁶⁵ Snir, *op. cit.*, p. 77.
- ⁶⁶ Kazzaz, *op. cit.*, p. 71.
- ⁶⁷ Kedourie, *op. cit.*, p. 358.
- ⁶⁸ Hayyim, *op. cit.*, p. 190.
- ⁶⁹ Rejwan, *op. cit.*, p. 214.
- ⁷⁰ Snir, *op. cit.*, p. 24.
- ⁷¹ Yūsuf Ghanīma, *Nuzha al-Mushtāq fī Tā’rīkh Yahūd al-‘Irāq* (Baghdad: al-Maktaba al-‘Arabīya, 1924), p. 188.
- ⁷² Anwar Shā’ul, *Qiṣṣa Hayātī fī Wadī al-Rāfidayni* (Jerusalem: Rābita al-Jāmi’īyin al-Yahūd al-Nāziḥīn min al-‘Irāq, 1980), p. 56.
- ⁷³ *Sofer u-Meḥanekh mi-Bavel: Dape Zikaron le-Ezra Ḥadad z”l* (Tel Aviv: ha-Histadrut ha-Klalit shel ha-‘Ovdim be-Erets Yisrael, ha-Va’ad ha-Po’el, ha-Merkaz le-Tarbut ve-Ḥinukh, ha-Maḥlaḳah le- Kḥīṭah ve-Pituaḥ, 1973), pp. 5-6.
- ⁷⁴ Snir, *op. cit.*, pp. 412-413.